大阪成蹊女子高等学校
校長　　向畦地　昭雄

令和４年度　大阪成蹊女子高等学校　学校評価

１　めざす学校像

① 本学園の建学の精神である「桃李不言下自成蹊」、「忠恕」の精神に基づき、「思いやりがあり、誠を尽くし人の立場にたって考え行動できる人材」、また社会に求められる「自立し、品格ある女性」を育成する学校（女子教育の推進）
② 女子に特化したキャリア教育を教育の柱として、女性として自主的に生きる力を育み、人間力を高めるために必要な資質や能力を育てる学校
（キャリア教育の推進と人間力の育成）
③ グローバル社会に求められる多文化共生のマインドと必要な能力を育むとともに、確かな学力と「使える英語力」の向上を図る学校
（国際教育・英語教育の推進）
④ 普通科の「特進コース」、「幼児教育コース」、「スポーツコース」、「総合キャリアコース」、「音楽コース」、「看護医療進学コース」と美術科の「アート・イラスト・アニメーションコース」の7コースの教育内容を高め、生徒のニーズに応える生徒の夢を実現できる学校
（多様なコースで夢を実現）
⑤ 共生の観点を基本として、他者を敬い、自己を肯定できる豊かな人権感覚を育むとともに、いじめのない安全で安心な学校
（人権教育の推進、安全で安心な学校）

２　中期的目標

1.学力向上と学校教育力の強化

① コースの学びの充実による人間力の向上
・各コースの特性に応じた様々な教育活動、コース行事、キャリア教育等を通じて、社会で求められる人間力の向上を図る。
②「主体的、対話的で深い学び」の実践による学力向上
・「基礎的・基本的な知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「主体的に学習に取り組む態度」を育成するため、「主体的、対話的で深い学び」の実現を図る。そのためにアクティブラーニングの手法等も取り入れながら、授業改善の取り組みを進める。
③ グローバル教育の推進とユネスコ活動
・コロナ禍において従前実施してきた海外修学旅行や海外研修などが行えない中でも、オンラインを用いた海外交流の取り組みなどを進め、生徒が多文化に触れる機会を絶やさないようグローバル教育に係る活動を継続していく。またユネスコスクール活動の更なる充実をめざす。
④ 使える英語教育の推進
・4 技能を中心に、英語教育の充実を学園の教育方針と合わせて強化する。とりわけ、リスニング・スピーキングを重視する「使える英語」の育成を進める。
⑤ 各種検定の合格をめざす実学教育の充実
・生徒の達成感を育む漢字検定・GTEC(英語検定)・秘書検定等の合格率や到達度の成果を高める。
⑥ ICT機器の活用
・1、2年生全員が使用する iPad の活用方法について研究を進め、iPadが生徒の「学びの道具」として効果的なものとなるよう取り組みを進める。この他、全教室に設置したモニター、ICT機器を活用した学習効果の高い授業を工夫する。

2.円滑な学校運営と安全安心な学校づくり

① 募集広報活動の充実
・中学生の大幅減少や私立高校の環境の変化に関わらず、常に生徒が集まる魅力的な学校をめざす。学校力の向上と募集広報活動の強化を両輪とした学校経営を推進する。
② 内部進学の増大と進路指導の充実
・生徒の多様な進路選択を尊重しつつ、学園全体の発展を見据えて、併設大学・短大への内部進学者の確保に全力を挙げて取り組む。内部進学率 60%を目標にする。
③ 生活指導の強化と自尊感情の醸成
・全教職員の共通理解のもと、全教職員による人権をベースとした生活指導(服装指導・頭髪指導等及び多様化する生徒課題に係る心のケアを含む)の徹底を図る。特に、生徒の自尊感情を醸成する「成蹊 pride」の趣旨を生徒・教職員で共有し、その確立をめざす。
④ いじめ防止と建学の精神を踏まえた教育の推進
・本校の「学校いじめ防止基本方針」を踏まえ、本校でのいじめ対策について全教職員で共通理解を図り、早期対応によりいじめのない学校をめざす。また、建学の精神に基づき、人間力教育を推進する。
⑤ 評価育成制度によるPDCAサイクルの推進と、FD研修の充実
・評価育成制度によるPDCAサイクルを通して、個々の教職員の資質と学校力の向上を図る。特に、FD研修の充実により、教職員の能力・指導力の向上を図る。

【自己評価アンケートの結果と分析・学校評価委員会からの意見】

学校評価アンケートの結果と分析

〇生徒及び保護者を対象に、R4年12月に実施した「学校評価アンケート」の主な結果は以下のとおりである。

【生徒】

＊生徒全体で見れば、全ての項目の平均値は 4 点満点法で 3.12 であり、一昨年度(3.04)、昨年度(3.10)から微増している。

＊共通項目別で最高値は「学校生活は楽しく充実している」の 3.28、最低値は「生徒会活動に関心を持ち、積極的に生徒会の活動に参加している」の 2.59 であった。前者は 3 年間で見ると 3.28→3.29→3.28 と大きな変化はない。後者は 2.36→2.47→2.59 とやや上昇傾向にある。これはコロナ禍で行事ができなかったものが、徐々にできるようになってきたことを反映しているが、この数値が低いのは、「生徒会の活動に参加している」という意識は「生徒会執行部や行事の企画委員に入っている」かどうかを判断基準と考える者も多いからだと思われる。生徒会行事そのものについては、「文化祭等の学校行事は、みんなで楽しく行われるよう工夫している」が 3.23 と比較的高い数値が出ていることから、行事への参加状況や満足度は比較的良好と考えている。

＊教員との関りを考える上で、「悩みや相談にのってくれる先生がいる」が、3.09 となっており、一昨年度(3.04)、昨年度(3.07)より微増しており、教員が生徒とのかかわりを深め、学校生活を送る上での支援を丁寧に行ってきていることがわかる。さらに生徒との「つながり」をつかめ、生徒の支援を充実できるよう取り組みを進める。

＊この他、学校満足度に係る項目として、「自分の所属コースに満足している」が 3.27、「この学校に入学して良かったと思う」が 3.15 となっている。学年やコースにより、若干の差はあるものの、概ね生徒の満足感は高いと言える。さらにこの数値が高まるよう、学校教育活動全般の充実を図る。

【保護者】

＊全体で見ると、「この学校に入学させてよかった(この学校を勧めたい)と思う」が 3.24(一昨年度 3.25、昨年度 3.26)と、微増減はあるものの、安定した数値が出ている。一方で

「生徒は学校生活を楽しく、充実していると感じている」が 3.18 であり、「入学させて良かった」の項目より低くなっている。保護者の満足度がさらに高まるよう、生徒への支援とともに、保護者への本校の教育活動・教育内容の発信に努めていく。

＊この他、「学校には他校にない良い特色がある」が 3.33、「併設の短大、大学まである総合学園の長所が生かされている」が 3.27 と、比較的高い評価を得ている。後者は進学先としての併設大学・短大の存在だけでなく、1 年生から様々な高大連携授業を充実させていることが背景にあると考える。今後とも、さらに生徒、保護者の期待に応えられるよう取り組みを進めていく。

学校評価委員会からの意見

▽令和4年度学校評議員

高木　恒夫	公益社団法人日本教育会大阪府支部事務局次長 （元　高槻市立第四中学校長）	山口　智子	(公財)大阪観光局　教育旅行(学校交流)コーディネーター・留学生支援担当 元大阪府立三国丘高等学校校長
元賀　圓治	認可地縁団体相川町会会長、 相川中振興町会会長、 大阪成蹊学園評議員	安達　宏昭	大阪大学大学院薬学研究科特任教授 ㈱創晶代表取締役、(福)あおば福祉会理事、柴又運輸㈱顧問、㈱dotAqua 代表取締役、㈱HOIST 取締役、(一社)レジリエンスジャパン推進協議会参与、(一社)日本 MA-T 工業会専務理事兼事務局長
小林　雄一	令和4年度 PTA 会長		

<u>第１回　令和4年7月7日</u>　会場　大阪成蹊女子高等学校　第2会議室　学校評議員 5 名出席

（令和 3 年度の学校評価アンケートについて）

〇コロナ禍で制約のある中、アンケートの数値が上がってきているのは、ピンチをチャンスに変えることができた先生方の努力の結果ではないかと思う。

〇「HRなどで将来の進路や生き方について考える機会がある」の数字が毎年かなり良くなっているので子どもたちがクラスの中でよい関係を築けているのではないかと考える。

〇音楽、看護、美術と比べて総合キャリアの数値が全体的に低いのは、意欲の違いが表れているのではないかと思う。

〇「自立し品格のある女性を育成する」にリンクするアンケート項目の数値がいずれも上昇しているのは、目指す方向性が一致していて成果として表れているのではないかと思う。

〇大阪成蹊女子高校の特徴として、大学との連携において将来につながるのが見えてわかることは大きな強み（看護学部や国際観光学部等）。連携が進んでいるとのことだが、先を見越して進路指導することで、アンケートの数値も上がるだろう。

（令和 4 年度事業計画について）

〇「人権」や「人間力」という文言をいれたことでわかりやすくなった。

〇全体的にメリハリがあってよいように思う。「勉強は勉強、遊びは楽しくやる」という方向でいければよい。

<u>第２回　令和5年3月14日</u>　会場　大阪成蹊女子高等学校　第2会議室　学校評議員　5 名出席

（令和 4 年度の学校評価アンケートについて）

〇1 年生と 3 年生では例年とそんなに変わらない評価と思うが 2 年生は低く感じる。

〇保護者結果においても 4（そう思う）をつけている数が少ないとは思うがコロナ禍で学校に来る機会があまりないという状況で、入ってくる情報は生徒からのみということも低い評価をつける要因になっているのではないかと思う。

〇学校に来る機会がある中で何かアピールや情報発信ができるとアンケート結果も変わるのではないかと思う。アンケートについては「ややそう思う」が多いと思うがやはりこの「ややそう思う」を「そう思う」に変える何かが必要ではないかと思う。

〇全体に占める青の部分（4・そう思う）の割合をしっかり見るのが大事かと思った。

〇最近、小学校においても「自己有用感」の評価項目が極端に低い数値がでている。「自尊感情」についての評価もやはり低く「自分に自信がない」「不安に思ってる」の数値が極端に低い。要因としてはコロナ禍で学校行事が減り「みんなで一緒にやる」ことが減ったことがこのような結果につながっているのではないかと思う。「自己有用感」や「自尊感情」が育っていないのではないか。マスクにより表情が伝わらないことで相手の思いが伝わらずいろいろな感情が育っていないのではないかと感じる。

（その他）

〇いまはすごく(生徒が)礼儀正しくなっており積極的に（生徒から）挨拶してくれるのでこちらからも挨拶しやすい。

〇高校でサポートルームという制度により不登校傾向にある生徒に対して手立てをしていただいてるということに感謝している。

〇ダイナミックな、他の私学ではやっていなかった取り組みを以前からやっておられたので、グローバルな教育（海外交流等）が復活すれば受験する生徒さんも変わってくるだろうし学校に対する保護者の考えもかわってくるでしょう。

３　今年度の取組内容及び自己評価

目標	今年度の教育目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価
１ 学習指導の充実と学力向上	① アクティブ・ラーニング(AL)の手法を取り入れた授業の実施	1.グループ活動での活用：グループ発表、討議等、探求活動などでALを適切な授業場面で実施する。 2.課題解決学習 ：一方的な講義形態に終わらず、主体的に生徒同士が協力しながら課題・問題を解決する学習方法を積極的に取り入れる。	学校評価「授業で自分の考えをまとめたり発表したりする機会」の肯定率	学校評価の肯定率が、R2＝68％、R3＝74％、R4＝78％と数値で確認できるとおり、多くの授業でグループワークや生徒による発表の機会が確実に増えている。今後もさらに取り組みを進める。
	②iPad の効果的な活用	1. 授業での iPad の活用：1、2年の授業での活用実績を高める。その中で効果的な活用方法等を教員間で共有することでさらなる活用を図る。	学校評価「教え方に様々な工夫をしている先生が多い」の肯定率 授業アンケート「授業で iPad やプリントなどをうまく活用している」（新規項目）の肯定率	「教え方に工夫をしている」項目の肯定率は、R2＝74％、R3＝82％、R4＝79％であり、教員の授業の工夫がさらに生徒に伝わるよう取り組みたい。 「iPad 等を活用している」項目（新規）は、R4 前期＝84％、後期＝86％となっており、多くの授業で活用されていることがわかる。さらにタブレットが生徒の学びのツールとなるよう、研究をすすめ、取り組んでいく。
	③評価育成制度を通した教科指導の充実と、公開授業、研究授業の実施	1.評価育成での教科指導力の向上 生徒による授業アンケートや評価育成制度でのPDCAサイクルを活用しながら、教科指導力の向上をめざす。 2.公開授業の実施	授業アンケート「興味・関心」の項目、「知識・技能」の項目の平均値	1.授業アンケートの「興味・関心」の項目は、R2=3.17、R3=3.18、R4=3.20、「知識・技能」は、R2=3.18、R3=3.23、R4=3.25 といずれも向上している。

<table>
<tr><td></td><td></td><td>年 2 回の公開授業週間を設定し、互見授業を進める。
3. 研究授業の実施
各教科で研究授業を行い、授業力の向上を図る。</td><td></td><td>2.公開授業は、1学期と2学期の各一週間の設定を行い、他の教員の授業を見たり、見せたりという互見授業の取組みを行った。
3.研究事業は、数学科、家庭科、芸術科美術、芸術科音楽、地歴・公民科、国語科、理科で実施。
教科指導のさらなる充実に取り組んでいく。</td></tr>
<tr><td></td><td>④各種検定の合格をめざす実学教育の充実</td><td>・検定合格や資格取得に対応する教科の取組みを進める。</td><td>各種検定の合格率</td><td>各種検定の合格率は以下のとおり。さらに合格率を高めるべく取り組む。
世界遺産検定 70.3%
秘書検定 49.7%
漢字検定 25.7%</td></tr>
<tr><td>2 全教職員が一体となった学校運営</td><td>① 生徒募集力の強化とコースの特色の鮮明化</td><td>1.募集広報企画室の活動に対する全教職員の協力体制を強化し、オープンスクール(OS)は全教職員体制で臨む。

2.コース毎に生徒ニーズと学校教育方針を反映した特色づくりを更に強化する。
【普通科】
ア.総合キャリアコース
併設大学・短大の学部学科との接続を鮮明化し、特色を中学生に伝える広報を充実する。
イ.幼児教育コース
体験実習等を実施するとともに、併設大学短大の教育学部、幼児教育学科との接続強化を維持する。
ウ.スポーツコース
併設大学経営学部やびわこ成蹊スポーツ大学との密接な接続を維持し、スポーツ系の学びを充実させる。
エ.特進コース
生徒の自己学習力の強化を図り、難関大学に進学できる学力伸長の取組みを強化する。
オ.音楽コース
大阪音楽大学との連携を推進するとともに、普通科の音楽コースとして、音楽への興味・関心をさらに高める取り組みを推進する。また第 1 期生の進路実現を図る。
カ.看護医療進学コース
コース設置2年目を迎え、併設大学の看護学部との連携を充実させながら、進路実現も意識した学力の向上を図る。

【美術科 アート・イラスト・アニメーションコース】
学内外の各種コンペでの上位入賞を今後も維持し、その成果を広く発信し、本学科の充実をアピールする。併設大学芸術学部への内部進学を更に強化する。</td><td>1.志願者数

2.各コース別志願者数と入学者数</td><td>専願（昨年度）＝415(415)
併願（ 同 ）＝522(514)
合計（ 同 ）＝937(929)
入学（ 同 ）＝494(505)

<table><tr><th>コース</th><th>専願</th><th>併願</th><th>入学</th></tr><tr><td>特進</td><td>14</td><td>33</td><td>19</td></tr><tr><td>幼教</td><td>54</td><td>40</td><td>60</td></tr><tr><td>総ｷｬﾘ</td><td>97</td><td>212</td><td>130</td></tr><tr><td>ｽﾎﾟｰﾂ</td><td>38</td><td>31</td><td>43</td></tr><tr><td>音楽</td><td>33</td><td>21</td><td>39</td></tr><tr><td>看護</td><td>56</td><td>49</td><td>62</td></tr><tr><td>美術</td><td>123</td><td>136</td><td>142</td></tr></table>
＜評価＞
＊私立高校を取り巻く厳しい状況の中、志願者数は昨年度を若干上回るなど、上々の募集活動となった。教職員が一致協力してオープンスクールで中学生を迎えたり、中学校・塾への働きかけを行ったり、インスタグラムでの高校生活の発信などが功を奏したと言える。ただ、公立高校が若干募集定員を増やしたことが影響したのか、併願の戻り率が昨年度より若干低下したため、入学者数は減少した。
＊次年度以降も 500 人の入学者を目標に全教職員で募集広報活動に取り組んでいく。</td></tr>
<tr><td></td><td>② 高大の教員間連携を強化し、内部進学の拡大と進路指導を充実</td><td>1.内部進学率の拡大
併設大学・短大への内部進学者の拡大に向けて、3 年生担任団と進路指導部との連携強化を更に進め、内部進学率 60%の達成を目指す。
2.学園内高大連携の拡大
併設大学・短大との学園内高大連携を更に強化し、連携授業の充実に努める。連携授業 100 以上をめざす。
3.併設高校生対象オープンキャンパス(OC)の充実
併設高校 2 年生・3 年生対象OCの充実を図る。
4.学習活動の継続
内部進学が内定後、進学後に必要な学力向上に向けた学習を継続させるための入学前教育を実践する。</td><td>1.内部進学率

2.学園内高大連携授業の実施数

3.併設校対象ＯＣの状況</td><td>1.内部進学率は、昨年度の R3=53.8％から R4=55.8%に上昇。今後も生徒の進路希望が叶えられるよう学校全体で取り組んでいく。
2.高大連携授業の実績は、R4 年度は 137 コマであった。今後も質の高い連携授業が実施できるよう、学園本部、大学、短大と協議を進めていく。なお、今年度は、連携授業とは別に、短大の調理コースで「レストラン実習の試食体験」等の取組みを行っていただいた。今後も新たな取り組みを模索し、良い取り組みを進めていきたい。
3.併設高校生対象のオープンキャンパスは、今年度は、3年生は4月23日、2年生は6月4日に実施した。2年生に早期に進路を考えさせるため、時期を早めた。R5 年度も同様のタイミングで実施をしたい。
4.併設大学・短期大学の各学部、各学科と連携し、入学前教育を実施した。</td></tr>
</table>

3 生活指導の充実	建学の精神を踏まえた女子教育の充実と、学園のブランド力向上運動と連携した生活指導の充実	1.女子教育の充実 建学の精神を踏まえた伝統ある本校の女子教育に必要な生活指導を徹底する。頭髪指導・服装指導など生活指導に関する教員向け指針を全教職員で共通理解し、全教職員による人権をベースとした生活指導を徹底する。 2.学園のブランド力向上運動 学園の運動と連携して、日々の挨拶運動等を更に進める。生徒会への働きかけも強める。 3.正しいSNSの使い方 近年のスマホ普及に伴い、生徒のSNSの正しい利用に向けて生徒への指導を強化する。ネット上でのトラブルを最小限に減らす取組みを推進する。	1.学校評価「学校生活について先生の指導はよくわかる」の肯定率 2.朝の挨拶運動の状況 3.スマホ関連の取り組み状況	1.「先生の指導はよくわかる」の肯定率は、R2=75％、R3=80％、R4=77％であった。生徒の納得感が高まるよう、さらに全教員で取り組んでいく。 2.生活指導部の教員等を中心に、毎朝取り組んだ。今年度は、生徒会執行部も学園正門前や下足室で挨拶運動を行った。引き続き、取り組みを進める。 3.毎年、新入生とその保護者を対象に講演会を実施している。今年度は、入学者説明会で外部講師を招き、「スマートフォンを安心安全に使うために;SNS の注意点」と題して講演会を実施した。
4 いじめ防止等の対策	いじめ防止の取り組みと、建学の精神に沿った豊かな人権感覚の育成	1.いじめ防止対策 学校制定の「学校いじめ防止基本方針」を全教職員が十分に理解し、建学の精神を踏まえつつ、生徒が互いに他者を理解し、尊重し合える豊かな人権感覚をあらゆる教育活動の中で育む。 2.人権ホームルーム 「年間計画」に基づき生徒いじめアンケートを実施し、いじめ等の未然防止に努め、安全で安心な学校づくりをめざす。また、いじめに対するガイドラインを遵守し、早期対応と組織対応に努める。	1.いじめ件数 2.ホームルームでの人権学習実施状況	1.今年度に認知したいじめ件数は1件。学校としてすぐに対応し、解決に至った。 2.人権学習の実施状況は以下のとおり。 1年「爽やかな人間関係をつくる」(7月) 2年「それぞれできる“こころ”を考えた行動」(9月) 3年「デート DV 防止　～あなたや友だちを加害者にも被害者にもしないために～」(11 月)
5 生徒会活動・部活動の活性化	生徒の自主性を育むことをねらいとして、生徒会活動および部活動を活性化	1.生徒会活動の活性化 生徒会としての日常的な活動を積極的にアピールし、文化祭、体育祭、予餞会の各企画委員の活動支援体制の拡充を図る。学年を超えた生徒同士の交流を深め、人間関係を円滑に構築できる力を育てる。 2.部活動の活性化 新入生に運動部、文化部への加入を積極的に推奨し、部活動・同好会の加入率を高め、部活動の活性化を図る。 3.生徒の達成感を高める活動の推奨 運動部以外の文化系部活のコンテストや発表会等の成績発表を充実させ、ボランティア活動を含めて、積極的に生徒の達成感・成就感を育み、生徒の内面を鍛える取り組みを進める。	1.学校評価「文化祭等の学校行事は、みんなで楽しく行われるよう工夫している」の肯定率 2.部活動加入率 3.コンテスト等の表彰歴、各種ボランティア活動状況等	1.「学校行事は楽しく行われるよう工夫している」の項目の肯定率は、R2=79%、R3=83%、R4=84％であった。さらに工夫をおこない、満足率を高めたい。 2.部活動加入率は R3＝54.5％から R4=49.5％と低下した。コロナ禍を反映していると考えている。R5 年度は新1年生への働きかけを強め、部活動の一層の活性化に努める。 3.表彰等の主なものは次のとおり。 ＊第 6 回日本篆刻家協会学生展(高校の部)入選 ＊全国ポストカードデザイン大賞　中高生の部　準大賞 ＊コーラス部　大阪府合唱コンクール　金賞 ＊チアダンス部　Dance Drill Winter Cup 2023(第14回全国高等学校ダンスドリル冬季大会) SONG/POM 部門 Small 編成　第3位 ＊生徒会 「第 8 回全国ユース環境活動発表大会近畿地方大会」出場(優秀賞) ＊若年者向けストーカー被害防止啓発ポスター　優秀賞 ＊関西新世紀美術展　関西新世紀賞 ＊大阪府障がい者スポーツ大会へのボランティア参加　等

4　今後の改善方策

1．学習指導の充実と学力向上

公開授業や研究授業の機会のみならず、普段から授業を通じて生徒の学力を高める取り組みを、学校全体として進めていく。梶田叡一氏によると、学習意欲・意志を高める内発的動機付けとして、「面白い」、「やりがいがある・自信が持てる」、「大事だから」、「しなくてはならないから」の 4 点があげられており、このことを踏まえて、改めて「わかる授業」、「楽しい授業」、「できたと実感できる授業」をめざして不断に授業改善に取り組んでいく。さらに「進路目標」を早期に持たせることも重要であり、進路指導の充実も図りつつ、結果として生徒の学習習慣が定着し、学力が向上するよう取り組む。

2．グローバル教育・英語教育の充実

コロナ禍で実施できなかった海外修学旅行や海外研修等が、令和５年度から実施できる見込みとなった。また、このコロナ禍ではオンラインでつないできた海外交流やイングリッシュキャンプなどの取組みを、対面で、あるいはノウハウを蓄積してきたオンラインを用いながら、さらに充実を図っていく。また、ユネスコスクールとしての活動や、本校生徒会中心の MOTTAINAI 活動をさらに充実させたい。

こうした取り組みを通じて、生徒にグローバル化が進む社会への参画意識を高めるとともに、コミュニケーション・ツールとしての英語への興味を高めていく。

なお、令和６年度入学生から新たに「英語コース」を新設し、これらの取り組みをさらに鮮明化させる。

3．コースの教育内容の一層の充実

本校の最大の特色は、生徒のニーズに応える２学科７コース（令和６年度からは８コース）の設定である。これまでそれぞれのコースで特色ある教育活動を充実させてきており、その内容は、誰に対しても誇れるものとなっていると自負している。今後も工夫に工夫を重ね、各コースの活動を一層充実させて、生徒・保護者の満足度を高めるとともに、取り組み内容を各種ツールを通じて発信し、より多くの生徒が本校に入学することを希望するよう、募集活動を強化していく。